

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04131

研究課題名(和文) 現代社会における 農村コミュニティ の意義についての研究

研究課題名(英文) A Study on the Significance of Rural Communities in Contemporary Society

研究代表者

清家 久美 (SEIKE, Kumi)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：00331108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、個の代替不可能性を可能にする共生のあり方を「普遍性-単独性」と「一般性-特殊性」という二軸論やその他の現代社会におけるコミュニティ研究から考察し、NPOの活動の視点から再価値化された農村コミュニティは、どのような意義があるのかを検討した。個の代替不可能性、唯一性、かけがえのなさなどが強調されている現状の中で、そうした個のあり方、他者との共生について検討した。それによって、個の代替不可能性についての検討 いかなる社会的背景においてその主張がなされるのか 本研究で対象とする日本の農村におけるコミュニティはそうした個の代替不可能性を保証するモデルとなりうるのか、以上3点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自己存在の「かけがえのなさ」=代替不可能性は必要なのだが、現代社会のシステムがこの代替不可能性の感覚を喪失させている。では、個の代替不可能性は、どのような共同性において可能であるのか。レヴィ=ストロースは社会を他の人々との対面的なコミュニケーションや関係性による小規模な「真正な社会」と、後発のメディア、法、貨幣など一般化された媒体に媒介された間接的なコミュニケーションによる大規模な「非真正な社会」のあり方に区別する。後者において包括的な経験、一人の人間が他の一人によって具体的に理解される時の複雑さは縮減される。包括的な経験を可能にする農村コミュニティの共生のあり方は都市社会への提言ともなる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we consider the way of coexistence that enables individual irreplaceability from the biaxial theory of "universality-independence" and "generality-speciality" and other community studies in modern society, and what the significance of the re-valued rural community from the viewpoint of the activities of NPO was.

In the present situation where the irreplaceability, uniqueness, and irreplaceability of individuals are emphasized, we examined how such individuals should live and coexist with others. By doing so, I have clarified the following three points,

(1) examination of the insubstantiality of individuals (2) in what social background is the claim made? and (3) Whether the rural community in Japan, which is the object of this research, becomes a model that guarantees such inalienability.

研究分野：社会学・現代社会論

キーワード：他者との共生 個の代替不可能性 レヴィ=ストロース NPO 農村コミュニティ

## 研究成果報告書

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまでの調査で明らかになった NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部（以下かみえちご）の農村活性化の活動において再価値化された農村コミュニティが、新たなコミュニティが模索されているグローバル化社会、ないしは日本社会においてどのような意義があるのかを明らかにすることを目的とする。「個人化」「液状化」したグローバル化社会において個の代替不可能性を可能にするコミュニティの可能性を小田亮の「普遍性-単独性」とそれが不可能な「一般性-特殊性」という二軸論やその他の現代社会におけるコミュニティ研究から考察し、かみえちごを足がかりに再価値化された農村コミュニティは、どのような意義があるのかを再検討する。本研究は農村の価値論を含む現代社会論におけるコミュニティ研究に位置づけられる。

### 2. 研究の目的

### 3. 研究の方法

かみえちごの説明：2001年に創設された新潟県上越市で活動展開する農村再生を目指した NPO 団体である。彼らの取り組みは明らかに農村再生の先進事例として特筆すべき対象であった。いくつかの特徴的な点を挙げると、彼らは単独の集落よりは大きく、市や町よりも小さな範囲をもつ集落集合体＝農村コミュニティを活動基盤として想定している。それらは、民俗的背景が共有され、自給自足が担保でき、直接コミュニケーションが可能な範囲を指す。500人程度の人口規模であれば、内発的自治が維持され、さらにそこに住む人々の「われら」が感覚共有できる。以下であげるレヴィ＝ストロースの主張する「真性な社会」に適合する。さらに農村と言っても閉鎖的ではなく、外に開かれたコミュニティである。都市から行き来する人々をもそのコミュニティに属すると考え、都市との関係において農村が考えられていた。土地に媒介された当該コミュニティの特徴は、生業やその土地における共生によって、彼ら独自のコミュニティの規範を共有している。それは、近代化、あるいは都市化において忘却された規範である。農村での生活は、その環境が五感の使用を要請し、人間としての生存感覚を回復させる。以上のような農村の特殊性を再価値化し、その価値を現代社会に接合させていく新たなコミュニティを構想している。

本研究では、かみえちごに見られる農村コミュニティの価値をさらに調査、深化させていくが、こうした農村コミュニティの価値が現代社会においてどのような意義があるのかということを中心にすることを研究目的としている。農村は、近代化、高度成長期における大衆社会化の過程で明らかに周縁化されていった〔成元哲 2003 他〕、しかし地方の時代と言われる今日、周縁化された農村が全体社会として包摂され、その価値や意義が再確認されようとしているが、それは都市目線からのノスタルジーを含んだ「田舎的なもの」の消費や流行りの地域再生への参加など、いまだその本質的価値には関心が向かっていない。本研究では、かみえちごの構想する農村コミュニティの考察を足がかりに、現代社会における農村コミュニティの意義を明らかにする。このことは、グローバリゼーションにともなってローカルな場所での共同性や社会的紐帯が分断され、「個人化」「液状化」〔U.ベック 2005, G.パウマン 2001〕が進んでいる中で、特に近年模索されている新たなコミュニティのあり方〔デランティ 2006 他〕に関連付けられる。

研究の出発点と枠組み：本研究の出発点になるのは、上田紀行の『生きる意味』〔2005〕の中で論じられている「かけがえのなさの喪失」である。現代社会において中心の問題になっているのは「生きる意味」が見えないことであり、その原因が「かけがえのなさの喪失」であると言う。人が生きていく上で、自己存在の「かけがえのなさ」＝代替不可能性は必要なのだが、現代社会のシステムがこの代替不可能性、比較不可能な自己という感覚を喪失させている。こうした議論は、上田のみならず宮台真司〔2005〕や G.リッツァ〔2005〕他も同様に展開している。では、個の代替不可能性は、どのようなコミュニティ、共同性において可能であるのか。この問題をさらに考えるためにレヴィ＝ストロースの主張を採用しつつ自分の論の展開をおこなった文化人類学者の小田亮〔2008, 2009〕の議論を検討する。

レヴィ＝ストロースは「真正性の水準」すなわち「3万の人間は500人と同じやり方では一つの社会を構成することはできない」という単純な区分から始め、この区分によって、社会を他の人々との対面的なコミュニケーションや関係性による小規模な「真正な社会」と、後発のメディア、法、貨幣など一般化された媒体に媒介された間接的なコミュニケーションによる大規模な「非真正な社会」のあり方に区別する。後者において「あの包括的な経験、つまり一人の人間が他の一人によって具体的に理解される」時の複雑さは縮減され、包括的な経験は規格化され、単純化された一般性や比較可能なもの、あるいは固定的カテゴリーへと還元される。小田はこれを「一般性-特殊性」の軸への還元と呼び、非真正な社会は「一般性-特殊性」の軸によって特徴づけられるが、それに対し個の代替不可能性を理解する「普遍性-単独性」の軸は「一人の人間が他の一人によって具体的に理解される」ことが必要条件となるゆえ、真正な社会においてのみ成立するという。彼はさらに「二重の社会論」を展開し、「一般性-特殊性」の軸の社会と「普遍性-単独性」の軸の社会は、それぞれが二項対立的に存在するものではなく、社会に二側面があることが必要であることを述べている。この枠組を用いて、かみえちごの構想する農村コミュニティの価値を再検討し、それは取りも直さず現代社会において個の代替不可能性を模索するコミュニティとしての文脈で再価値化されることになる。

### 4. 研究成果

1) 農村コミュニティの価値についての議論を検討した。2) かみえちごの構想する農村コミュニティの考察をさらなる調査により深化させ、その価値をさらに明らかにした。3) 現代社会、グローバル化社会におけるコミュニティについての議論を整理・検討した。4) 個の代替不可能性を可能にするコミュニティ・共同性のあり方についての理論的追求をおこなう。現代社会論、コミュニティ論、ハイデガーやレヴィナスなど哲学における議論の網羅や理論の整理をおこなう。特に小田の二軸の枠組みについては整理、深化させた。5) 4) までをふまえ、農村コミュニティの現代的意義を考察する。以上の5つの研究プロセスをおし進めていった。

本研究において文献調査とフィールド調査が必要であった。文献調査においては、地域再生・農村社会学に関する文献研究 現代社会論・社会構想論に関する文献研究 コミュニティ論に関する文献研究 思想・哲学における個の代替不可能性の研究 NPO/NGOに関する文献研究 おおまかに分けて5つの分野の文献研究が必要であった。それぞれの分野における、理論的検討と総合をおこなった。また対象となる地域でのフィールド調査をおこなった。新潟のNPO法人かみえちご山里ファンクラブを地域活性化の活動等においてインタビュー等の質的調査をおこない、それらをデータ化し、分析していった。一定の考察の蓄積によって、それに応じて研究会、シンポジウムを開催した。

本研究は、個の代替不可能性、唯一性、かけがえのなさなどが強調されている現状の中で、そうした個のあり方、他者との関係性、他者との共生について検討することを研究目的とした。個の代替不可能性とはどのような意味内容なのか いかなる社会的背景においてその主張がなされるのか 本発表で対象とする日本の農村におけるコミュニティはそうした個の代替不可能性を保証するモデルとなりうるのか、以上3点を明らかにした。

代替不可能性についての様々な視点を検討

#### 1. レヴィ=ストロース:人類学者の経験則による共生

1) ...われわれの他人との関係は、折にふれての、断片的なもの以外、もはや、あの包括的な経験、つまり一人の人間が他の一人によって具体的に理解されるということにもとついていない。われわれの人間関係は、かなりの部分、書かれた資料を通しての間接的な再構成にもとついていて、われわれが過去に結びあわせているのは、もはや、物語り師、司祭、賢者、故老などの人々との生きた接触を意味する口頭伝承によるのではなく、図書館につまった本によるのであり、それらの本を通して、鑑識力が骨折ってその著者の表情を再現するのである。現在の面では、われわれは、同時代人たちの圧倒的な大部分と、あらゆる種類の媒介 書類、行政機構 によって連絡しているのであるが、これらの媒介は、多分、途方もなくわれわれの接触を拡大してはいるが、しかし同時に、われわれの接触に、まがいものの性格を付与しているのである。このまがいものの性格は、市民とももろの権力とのあいだの関係の特徴にさえなっているのである。

われわれは逆説に耽るつもりはないし、文字の発明によって導入された巨大な革命を、否定的なやり方で規定しようとも思わない。ただ、文字が、人間に多くの福利をもたらしたと同時に、人間からある本質的なものをとりあげてしまったということは、是非とも念頭におかなければならない。間接のコミュニケーションの形(本、写真、新聞、放送、その他)に起因している自律性の喪失を認識するというただそれだけのことが、不思議にも、現在まで、国際組織、とりわけユネスコに欠けていたのである。...

たしかに、近代社会も、すみからすみまでまがいものだというわけではない。人類学的調査の接合点を注意して眺めるならば、むしろ反対に、近代的社会の研究にしたいにつよく関心をもつことによって、人類学は、近代社会に「真正の面」を認知し、それをとり出そうと努めてきたことが確かめられるのである。このことが、民族学者が、ある村、ある企業、またはある大都市の「近隣関係」(アングロ・サクソンが「ネイバーフッド」と呼んでいるもの)を調査するとき、民族学者として馴染み深い場に自分がいることを彼に気づかせるのは、そこではすべての人たちがすべての人を知っているか、そうでないまでもほぼそれに近い、ということなのである。同様に、人口学者が、近代社会の中に、未開社会を特徴づけているのと同じ大きさの等級の隔離集団が存在するのを認めるとき、彼らは人類学者に手をさしのべ、人類学者はこのようにして、自分にとっての新しい対象を発見するのである。ユネスコの後援で共同体についてフランスでおこなわれた調査は、この点できわめて啓示的なものであった。調査者(その若干は、人類学的な教育を受けた人たちだった)は、五〇〇人の住民の村 それを調査するのに、彼らの古典的な方法を変更する必要はまったくなかった で、少しも場ちがいに感じなかっただけでなく、中都市でも、彼らは、もうこれ以上還元できない対象に出あったという感想を抱いたのである。なぜだろうか? なぜなら、三万の人間は、五〇〇人と同じやり方では一つの社会を構成することはできないからである。第一のばあいには、コミュニケーションは、人と人のあいだに、つまり個人間コミュニケーションの型の上におもに成り立っているのではない。「発信者」と「受信者」(コミュニケーション理論の言葉でいうならば)がつくる社会的実体は、「符号」と「中継」の錯綜の背後に消えてしまうのである。

将来おそらく、人類学から社会科学へのもっとも重要な貢献は、社会的実存の二つの様相の、この根本的な区別を導きいれた(意識しないで、ではあるが)ことにあると判断されることだろう。つまり、一方は、原初において、伝統的でアルカイックなものとしては認められた生活様式であり、それは何よりもまず、真正の社会の様式である。他方は、より後になってあらわれたもので、第一の型もたしかにそこに不在なのではないが、不完全にまた不十分に真正な諸集団が、いっそう広大な、それ自体まがいものの刻印を打たれている体系のもとに、組織されているのである。(レヴィ=ストロース『構造人類学』1972/1958, pp.407-419.)

2) まずはこのレヴィ=ストロースの主張する社会科学に対する人類学の貢献は、どのように意義づけられるのか。こうした研究者としての調査における経験的な感性が、実はコミュニケーションのあり方、ひいてはその重なり先の先にある共生のあり方に示唆を与えている。他者との関係の包括的な経験を、つまり「一人の人間が他の一人によって具体的に理解される」関係性が担保される社会が「真正な社会」であり、媒介はわれわれの接触にまがいものの性格を付与し、「まがいものの社会」である。レヴィ=ストロースの議論に則ってその「真正な社会」を他者との共生の一つのあり方として考えられる。

ただ、包括的な経験を通して他者を具体的に理解することをもって、そのまま代替不可能性と考えられるのか。コミュニケーション、あるいは共同体の規模の問題を論じているに過ぎないとも考えられる。小田の議論もその点におい

て弱いとも考えられる。

では、問いを確認すると、なぜこの主体の 代替不可能性、かけがえのなさという概念が必要とされているのか。また、主体の代替可能性という概念はどのように生まれてきたのか

2. ハイデガー:いわゆる「存在」についての初めての問いを問い、主体の代替不可能性という概念をも提示

ではハイデガーによって「存在」はなぜ問われなければならなかったのか。その出自を知らなければならない。ハイデガーにおける死を措定した、主体の 代替不可能性。自らの存在と死に対する特権的な関わりによって唯一性を獲得する。代替不可能は自らの生死を措定し、それとの関わりによって主体の代替不可能性は保証される。しかしこれは普遍的な対自的代替不可能性でもある。

3. カントの実践理性に見られる自我の代替不可能性:「自由の因果律」代替不可能な超越論的統覚 / 自我

西洋の伝統的な思索に位置づけられる。神無き時代のそれに代わる絶対性、普遍性への追求。そしてそれはデカルトのコギトについての研究を踏襲している。

カントの自律は、仮言命法を超えた、「定言命法」によって表される。「～したいならば、～せよ」という形式である仮言命法は、人間の欲求に制約されるため条件付きかつ経験世界においてなされる。一方定言命法は、無条件に「～せよ」と命じる。その条件によって、主体が満足する、あるいは幸福になるという損得とは関連しない。理性的主体は、定言命法で表現される道徳法則を知っていて、それに無条件で自発的に従わなければならない。理性自らが知っている法則で自分を律するのが自由の因果律である。それが自律かつ自由なのである。

4. ギリシャ時代から問題になったのは、端的に現れることこそ根源的なものを考える傾向があった

アリストテレスにおけるパトス:「端的に訪れる」もの。そして意思はその端的にあらわれるものとされた。カントはそれに強く傾向している。

神を説明するギリシャ時代からの知的伝統として: その人そのものとしてのパトス

主意主義(意思) / 主知主義(世界を合理的に知識で説明): 前者は後者を批判する、その理由は意思を知識には還元できない「端的なもの」であるから。アリストテレスは、端的にあらわれるものを、共感力 = 「パトス」と説明。端的な性質である意思は、世界の根源的な規定不能性である。(感情も同様)『アリストテレス 弁論術』岩波文庫 1992

5. アレントの代替不可能性: 労働 / 活動の議論などに見られ、彼女の中心的なテーマの一つである。背景としては、全体主義の中で、個々人が代替可能な、均質な存在になっていくことへの抵抗、批判としての位置づけ。

6. レヴィナスの代替不可能性: 他者によって代替不可能性は保証される

『存在のかなたへ』『われわれの間で』『唯一性』: それぞれが唯一的なのではなく、他者との関わりである倫理によって初めて唯一者となる可能性がありうる。

唯一性は、個性と捉えられることがあるが、「類の共通性を想定した相互的で純粹に論理的な否定性」に過ぎないという。前提としての全体性、共通性とそれを背景とする差異。つまり唯一的ではない。個々人の権利を基礎づける法理論は、「普遍者と個別者の論理」に基づく。全体性という視点からは、排除を含む。そうではない「唯一者」とは、自他の関係を、一つの全体に抽象される思考とは別の方法で考えられるべきである。それは自我 / 他者のように、集団への抽象化ではなく、お互いの類似にもとづいて成立する。しかし他者の唯一性は、類比的思考によって成立するのではなく、具体的他人の唯一性を他性として議論する。自己の唯一性は初めから備わっているのではなく、他人の他性は唯一的であり、その他人と関わることにより、自己の唯一性は成立する。

『全体性と無限』『生とは身体である』。一方では身体であることは、自らの主人であること。また、他方では、「大地と密着すること」でもある。身体であることで、私は「土着的」となる。自己の獲得であるとともに、自分が定位する大地の獲得である。

7. 井上達夫『他者への自由』他者に関かれた自由

自己中心性はどのように制約されるかという問いを主題とする。井上は他者が私に対して放つ「攪乱性」を積極的に肯定し、「他者」を融合することなく他者を自己変容の触媒として受容する節度と度量を兼ね備えた自由」と「他者への自由」として養護する。また彼は、自由が養護されうる秩序を「国家・市場・共同体という競合する秩序形成原理が相互に抑制し均衡をはかる」点に見出そうとする。

8. 社会背景として代替不可能性という抗い

1) 社会背景としてのフランクフルト学派

ハーバマスのシステムとは、社会が機能分化した結果として、政治システム経済システムのことである。システムに依る生活世界の植民地化とは、権力と貨幣が生活世界というコミュニケーション的行為がおこなわれる地平に入り込んで相互了解する日常的コミュニケーションを、成果志向的ななり方に変容させることを指す。

生活世界、すなわち家族や地域がそもそも存在し、都市化や郊外化が生み出したシステムは、生活世界の便益向上させることにおいて受け入れられた。生活世界がシステムに対する前提的な尺度であり生活世界はシステムの外にあると考え、そこにわれわれ意識が存在していた。しかし脱埋め込み化は、特に過剰流動性と共に、そうした生活世界が根をおろしていた状況を簡単に否定し、システムの植民地化となった。

巨大なシステムと植民地化されない生活世界の両立の必要性：自律的生活世界＝クニ

しかしこのシステムを批判しなければならない根拠は： リスクを把持するシステムへの依存的な生活は、システムに問題があれば同時に個々人にも問題が生じる危うい生活のあり方 システムにおいて、自己は代替可能な部分としてそれぞれの尊厳が奪われる（ハーバマス他）

グローバル化とテクノロジー化がもたらす巨大システムに依存せずに自立できる自治的共同体の樹立のみが今後の社会の可能性を開く。しかしそれが可能にならない。

2) 過剰流動性：パウマンなどの「リキッドモダン」などで説明される現代社会あるいはウェーバー

・近代の社会において、脱埋め込みの過程で、主体は伝統や共同性を選択し、選択するという点において、主体は確固たるものになった。確固とした主体が、近代の再帰性を進めていく。そしてその選択するのは信念である。代替不可能な確固とした主体は、流動性の高さがそれを強化したとも言える。

・ウェーバーの近代化における合理化によって、計算可能性が増大し、人は代替可能になり、主体、個性、その人がその人であることでなくなる。鉄の檻

パーソンズも、主意主義的な主体を計算可能性を裏切るものとして定義化する。

9. 環境倫理のレオポルドとキャリコット「土地の倫理」

引越すことができる代替可能性の場所と、たとえば故郷としての代替不可能性

代替可能な場としてのシステムと、代替不可能性を保証する場所としての生活世界

土地への感情と、われわれをつなぐ感情と生活世界

10. デリダ：寛容ではなく歓待という考え方—条件なき歓待(略)

11. アンレカ・ジュパンチッチ「リアル」の倫理：カントの自由意志論をさらに発展させる(略)

12. 代替不可能で、さらに能動的な主体として

・ハーバマス『認識と関心』：認識は知識であり、関心はコミットすること。知識だけでは社会は回らず、価値コミットメント、道徳の必要性を主張する。(パーソンズ：主意主義的な行為理論)

価値コミットメント：道徳的主知主義 / 道徳的直観主義

理由ある利他(功利主義的帰結主義) / 理由ない利他(ギリシヤ的道徳的直感主義)

理由なき利他は、内から湧く力、徳にもとづく内発性

cf. アーレント「労働/活動」、ギデンズ「感情の民主化」、ウェーバー「非合理人」、  
プラグマティズム(エマソン、デューイ、ローティ)、サンデル、一般意志

13. 人類学や日本思想に見られる、そもそもの交換可能性

・対称性人類学

・野生の思考

・メルロ＝ポンティらの、見えるもの見られるものの交換可能性という考え方

・日本の禅の思想などにみる、対象化しない見方

農村コミュニティにおける個の代替不可能性のモデル化の模索

桑取谷を「クニ」と呼んでいる。そこは水の大循環、自分たちをまかなえる食物、多様な地域資源、人間のまかない、文化のまかない、あるいは資源フローによる少量多品目の高付加価値産品。協働、交換、貨幣の経済がバランスする場所。このように「外に開かれながら内の生存自給と命の保持が出来る場」こそ「クニ」という言葉の意味である。

「多くの人たちが桑取谷にみる夢もまた、このような「クニ」という響きの中にある。広域合併、道州制へと行政密度が希薄化する未来では、各地域が独自の基準(部族基準/トライバルスタンダード)によって、コンパクトな「クニ」化をおこない、自前の道と自前のまかないを目指す動きにならざるを得ない。桑取谷の試みが未来を担っているとすれば、そのような「クニ」の先駆けとして、各地での「クニ」づくりを行なえる「人間」を育てる「クニ」になることに尽きる。

これらのクニを形作る人々のくくり方は、市民ではなく、単一のムラ人でもない、しいて言えば部族的なものである。新しい部族的なコミュニティが必要なのである。その部族的な五感共有コミュニティの創出と、その差異化/個性化が鍵となる。トライバル(部族的)スタンダード(基準)が特徴をかたちづくるのが新たなクニなのである。さらにその「場」においては、さらに「個」そのものの再生が行なわれなければならない。

すなわち、そうした農村での代替不可能な個の共生のあり方が考察された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 竹沢尚一郎	4. 巻 44-(1)
2. 論文標題 「アグリビジネスから食の民主主義へ 岐路にある日本とフランスの食と農」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『国立民族学博物館研究報告』	6. 最初と最後の頁 129-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹沢尚一郎	4. 巻 6月号
2. 論文標題 「アグリビジネスから食の民主主義へ アグリビジネスに対抗するフランスとEUの農業政策とわが国の現状」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『中央公論』	6. 最初と最後の頁 150-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takezawa Shoichiro	4. 巻 15
2. 論文標題 “From Agribusiness to Food Democracy: Comparative Study on Agricultural Policy and Organic Farming in France and in Japan”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Web page of the Fondation France-Japon de l' EHESS	6. 最初と最後の頁 10-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「批判理論（T.アドルノ）と新実在論（M.ガブリエル）における 対自然 の類似性についての比較検討」
3. 学会等名 日本社会学会 第92回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「社会科学における 対象 把握についての一試論 - 批判理論・新实在論・構造主義の比較研究」
3. 学会等名 第17回APカンファレンス
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 基調報告「帰納的方法による アジア太平洋学 の提案に向けて - 人文社会系専門における個別研究からの試論」(「アジア太平洋学構築の模索に向けて」第5弾)
3. 学会等名 第17回APカンファレンス
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「新实在論の視点による社会運動理論についての一試論 哲学の社会学理論への援用可能性の模索」セッション「社会運動研究における理論・方法の再検討 組織・説明中心パラダイムをこえて」
3. 学会等名 日本社会学会 第91回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「社会学における 対象化 についての一試論」
3. 学会等名 日本社会学理論学会 第13回学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 基調講演「ドイツ観念論における大学論、そしてポスト構造主義、新實在論における大学論ヘーカントからデリダ、そしてガブリエルへ」 第34回APカンファレンス「アジア太平洋学構築の模索に向けて」第4弾「大学論再考 古典から現代の大学論研究、そして現代、未来社会の構想論的の視点から」
3. 学会等名 第16回APカンファレンス
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「新實在論の視点による実証主義論争の再検討について」
3. 学会等名 日本社会学会 第90回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「実証主義論争に関する新實在論の視点による一提案」
3. 学会等名 日本社会学理論学会 第12回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「アジア太平洋学構築の模索に向けて」プロジェクト 第3弾 「アジア太平洋地域における思想的・理論的課題の検討ー 知の近代 をめぐる諸学問領域からの現代的提案」 「実証主義論争における 知の近代 についての新實在論の視点による再検討」
3. 学会等名 第15回APカンファレンス
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「近代における代替不可能性の個を前提とした共生のあり方について 農村NPOを事例に」
3. 学会等名 科研研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「現代における個の 代替不可能性 を保証する共生のあり方について」
3. 学会等名 日本社会学会大会 第89回年次大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「カント倫理学と討議倫理学における普遍性 / 個別性の問題についての検討」「アジア太平洋学構築の模索に向けて 第2弾」
3. 学会等名 第14回APカンファレンス
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 基調講演「代替不可能な個と 共生 、さらに 寛容 から条件なき 歓待 に向けて」(RCMA「現代における 共生 についての模索」シンポジウム)
3. 学会等名 RCMA研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「日本社会における 共生 の模索についての一考察」
3. 学会等名 近代日本学会 第34回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「代替不可能な個と 共生 、さらに 寛容 から条件なき 歓待 に向けて」
3. 学会等名 「現代における 共生 についての模索」Kaken シンポジウム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「『アジア太平洋学』を考える」
3. 学会等名 RCAPS 20周年記念シンポジウム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 清家久美
2. 発表標題 「熊本・気仙沼・APU」～東日本大震災と熊本地震、私たちのこれから～」
3. 学会等名 気仙沼プロジェクト・シンポジウム
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	竹沢 尚一郎  (TSAKEZAWA Shoichiro)		元民族学博物館教授